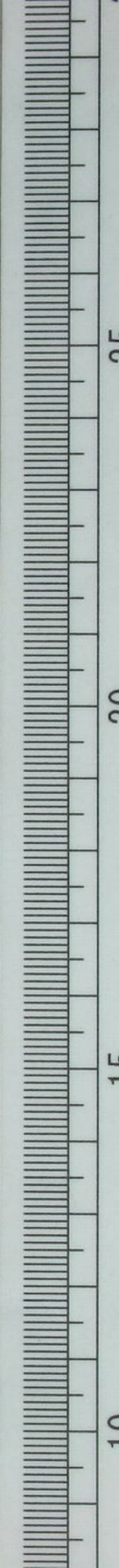


西南太平記

沼尻絰一郎編輯

大
号
上



A434
9

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平洋記

東京

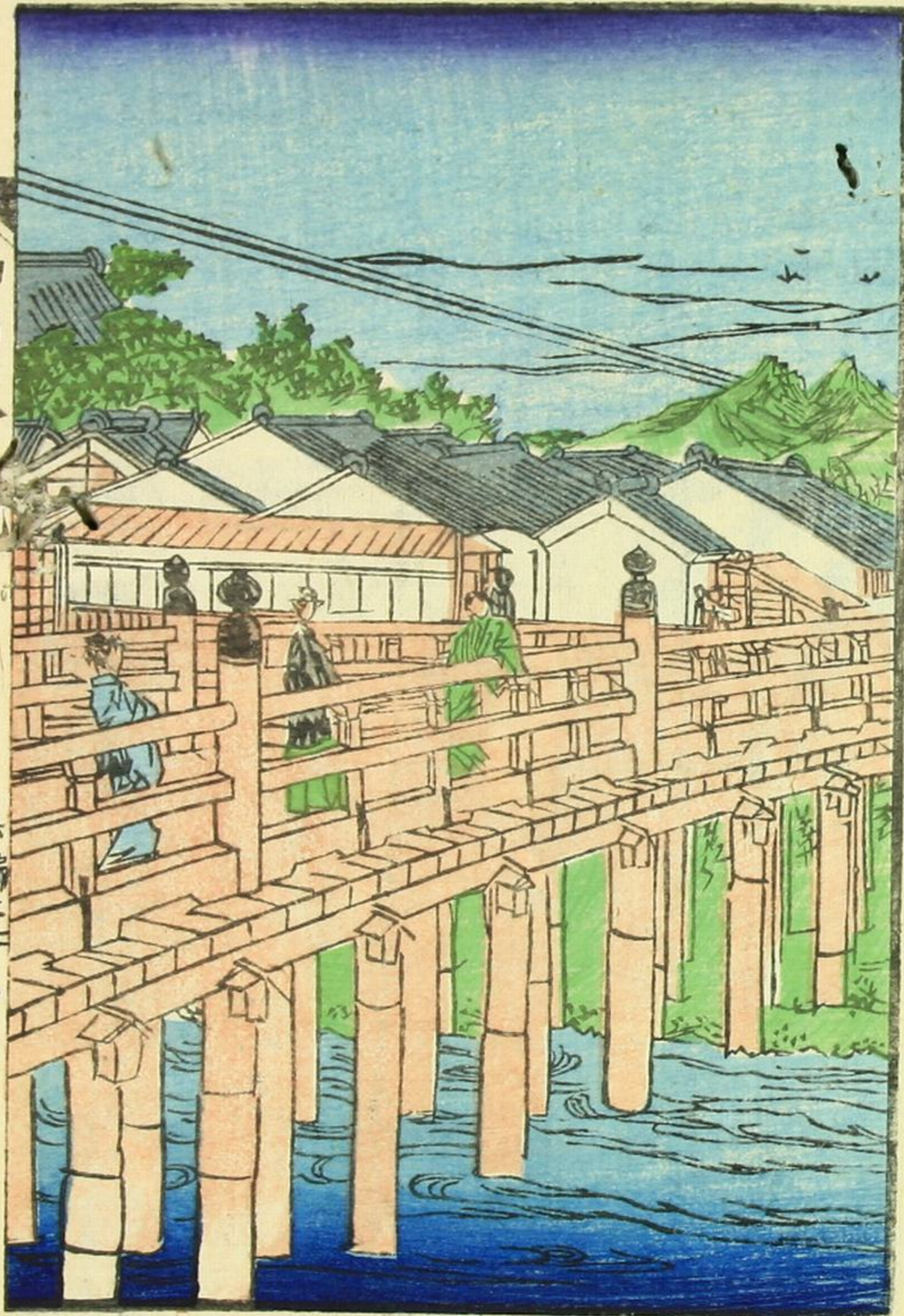
萬笈閣發兌

叙 江湖の諸君に呈白する言に曰く嗚呼一ト度妖
 氣の安寧を攪乱せし亦と盡く安居寧處する
 に暇ありべしと久ども就中鹿兒島變動のその顛
 末と録せざざる西南太平洋記の題殆ふ背き頗
 る全本ありざるに似たりも余も目今の事情且
 つて戦地の確報を探り得ず遺漏を補ふに
 刷行及び六号にりつて看官の高覧と給を
 幸甚而也

明治十年四月

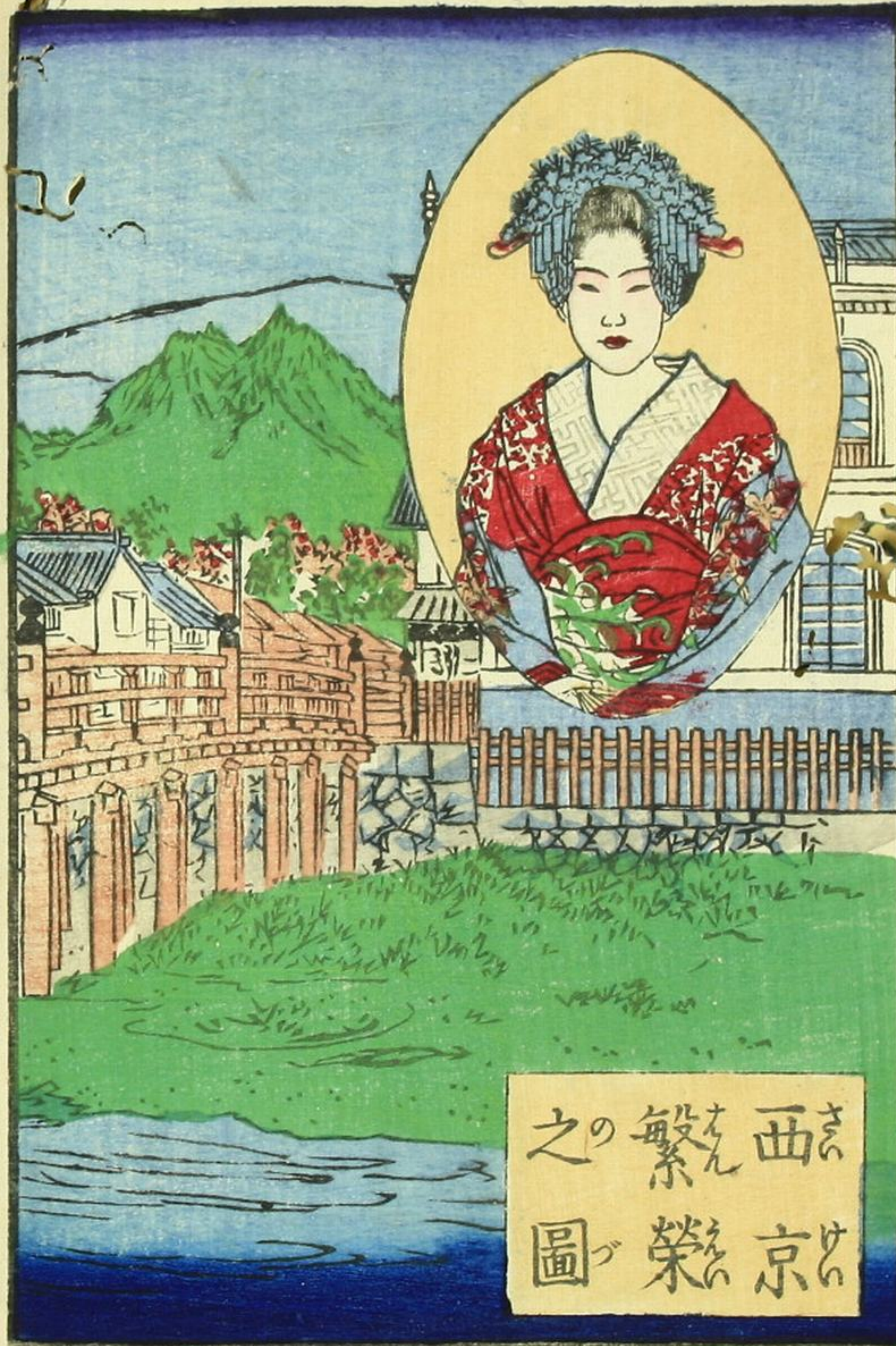
大々錦誌

48-7792



古
町
の
橋

六
編
上



西
南
大
平
野

西
京
の
繁
榮
之
圖

西南大平

大編上三



越智彦四郎

久世芳麿



村上彦十

西南大平

大編上三

肥後助左衛門



西南太平記六編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第十一回

暴徒福岡の城み迫る
并木留八代大激戦

或人曰く暴徒の攻撃をさるふ術ありや何ぞ諸方の
烈戦よ砲煙天と捲きて流血地よ漲り死屍と積む
山と為し屢官軍と戦争と交へしより八代口の
官軍の三月二十四日の拂曉に大に進軍して宮原

西南太平記

六編上二日

及び種山の賊壘を交撃奮闘一々の巢窟と抜
きて其兵勢益々熾んみして勇進激烈なる状を
宛然泰山も為ふ碎くかど計りに怪しむに至る
茲ふかいて官軍直よ奮進一々大野山の賊と砲撃
するは砲聲山海と鳴動す賊軍の此所と先途と
暫時の逐つ追われつ必死よありて戦ひしが官軍
の将士身と跳して單身賊軍の群ぐる中に馳入
らんと兵士も蹄令して其兵氣と属したるみぞ

兵士の精神益々加はり奮撃突戦呐喊叫んで戦
ふよぞ賊の之と視て千變萬化も防戦したるど
勇氣日頃よ百倍せし勢ひも流石の賊徒も遂は怖
へ兼四途路ふまろく深と計りみ壯ると官軍勝
み乗トて追撃一北川村の先まで進きて兵と先
に乗取り一賊壘の要所も配賦す此の戦ひの日
没のやうく止となり又東京府士族舊幕府の
新徴組もて樂巖寺業輝の有名の撃劍家あり

一が四月上旬トウサツゲンふ九州キウシュウの暴徒征討ボウトウセイタクのお味方オミカタと
 願ネガひ出イッんと數人スウジンと引ヒ卒ソウるすに神原鍵吉門人カネキチカドミ
 ありて南本所番場町ミナモトノバシバシに居イる佐藤義照サトウギサネの弟ケイと言イ
 ふ大島安之助オオシマヤスノスケの本年コノトシ二十九ニジュウキウ先年ゼンネン戊辰ボウシンの事件ケンケンに
 彰義隊シヤウギタイの群ウラにあり今回イマド又マタ樂巖寺ガクワンジの人数ウネズに加カ
 つり出兵シツペイに赴ムカふんと其手續ソノテとるせよ又マタ林原鍵ハヤシノキ
 吉キチも門人カドミの英勇エイユウ百餘名ヒャクヨと募ムコらんとして九州キウシュウの
 賊徒征討ソクドセイタクのお味方オミカタと目的トクテキのるせよと大島安之助オオシマヤスノスケの助スケ

の借財シヤクサイの為タメふ東京トウキョウにも潜行センコウありがとく樂巖寺ガクワンジ社シャ
 中ナカより金圓キンエンと借カり受ウけて内藤新宿ウチノテシンジュクの茗荷屋メイカヤと
 云イふ貸座敷カシザカの出稼デウカを為ナす阿福アホクといふ人ヒトに今年コノトシ二
 十三年ニシヤン五月ゴ月ゲツよりある娼妓シヤウキと深く馴染ナジミて金圓キンエン多タ
 分ブンと送りオウりし又マタ神原鍵吉カネキチの周旋シュゼンとりりて金キン
 融ユウ成テイ為タり内藤新宿ウチノテシンジュクの阿福アホクがりしと通ツウひが阿ア
 福フクの親元オヤノモトの以前イマゼ三田ミタの伊勢屋イセヤとありて諸屋敷シヨヤシキ
 の人足ヒトタラシ請宿ウケヤドのより旧人キウジン入れ道中師ミチナカシと唱ナゲるあり

且ツよの阿福の茗荷屋に身と寄せ出稼ぎ中安
 の助と深く馴染互に迫り大島の僅くは疲身上を
 入り上げて阿福の妙なる勇士に惚れて無理算段の
 身上りよ親方始り其外へも義理の悪い借財嵩
 と殊ふい去る二十三日くろ廿五日の晩まを安之助
 居續といたる勘定もたず宅へ帰らるる今でハ
 胸もむすろもて熟々二個りダ相談とせらるに安之
 助の申すよふめり樂巖寺業輝の七十二人のふ

味方組の事を最早樂巖寺どのへも申し訊き
 神原健吾の金も不義理とあり迎も斯くの始末
 にあつてハ此世で夫婦とありがごとくと兄佐藤に
 一書と贈りて寧ろ死どが増であらふと其夜曉
 の四時頃又兼て準備の短刀で阿福の咽喉と只一
 突アットをかりよ一声叫んどのと若い者聞付て
 二階の階子を登つて見廻る由え安之助のちや
 必死の勢ひよ若者ハ其終下へ逃げ下り此間ハ



大島安之助金又迫
て妓樓に
横死す



安之助の自己が腹を斬廻し虫の息が通つて居ると大勢がよつと押止め改めつるゝ二個の書置あまを全く情死と決したりと

説云大島の去る戊辰の年彰義隊の一人あて上野戦争の時と篠原と戦ひ小指と落され働きたると斯の如き英勇ありける

また小滋賀縣下西大路の士族浅井辰政外七十二人此度の儀に付鞆下の御守衛ふ差かへと

願ハサシ又長野縣下士族北原新と東京府士族岩崎景國西方貫道の三人の従軍と願ひ出此三名樂巖寺同伴とつゞも借も彼の地の植木口の方へ去る二十三日よ木留峠まで九一里半の所を戦争の線とあり官軍進撃の際賊の臺場七ヶ所の内四ヶ所と乗取り余程烈しく戦ひけるうぞ死傷も多かりし終に勝敗決せずして日暮に至りて戦ひを止めたり翌二十四日十二時よ至りて木留

又攻寄せ是より晝夜攻撃せんとの軍畧ありよ
 蓋し賊徒の常ニ要害の地ニ拠りて固守し猥り
 發砲せず然れども發するを多く空彈ありと其
 砲術の妙し峻路を奔走するの自在あり熟練
 人々驚愕せざるあり又過る十九日福岡
 の賊の魁首久世芳磨越智彦四郎文光思太郎
 建部小四郎村上彦十舌間慎五郎八木和一始トめ
 凡千二三百人三ヶ所へ火とかけ賊兵の城下へ迫

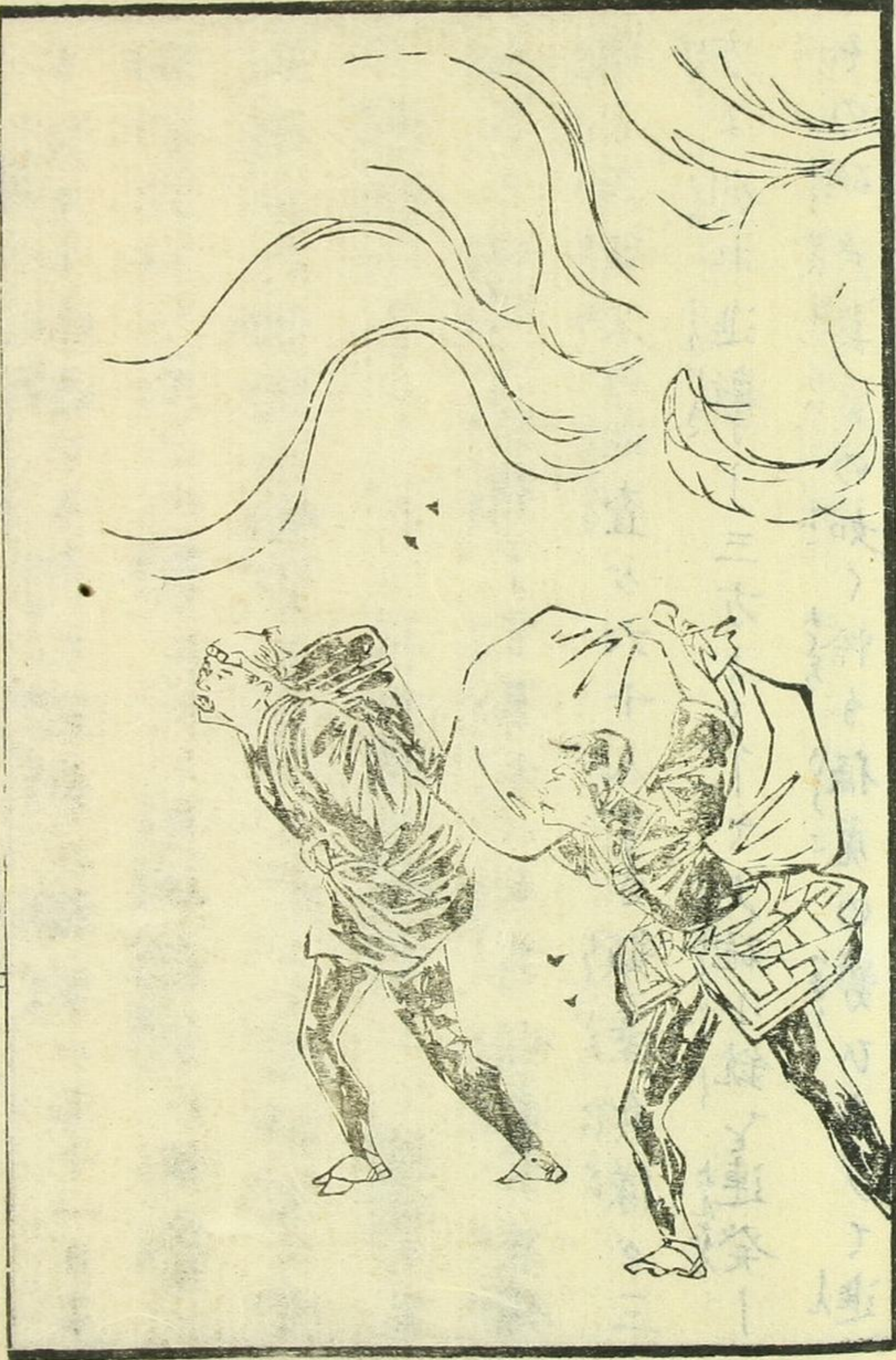
此方の鎮臺が一小隊に福岡舊城の内外と固
 め又城下ニ陣を取り輜重兵に懸懸と固め其内
 名古屋鎮臺が一大隊繰込と力と尽して進撃し
 福岡城下の騒動ひとりごとありずとて斯て肥後路
 同二十五日賊徒が未と夜も明果を朝霧深
 く一々咫尺も弁せざる又木留植木口の両所と
 襲ひ朦朧たる霧の中より此處彼所へと切て出
 官軍の大小砲と連發するも賊の出没神速

よして深霧中よりありて敢て形蹟と露のさず或
 へ突然官軍後より頭れ或の隠然として霧中より匿
 る茲よおいて官軍大に砲撃する目的は審一と一
 時の苦戦より一とと稍蔽ひ霧の晴るるに當
 り漸やくみりて追拂ひより木留口の又候午后
 八時ごろより賊徒再び攻来る然れと官軍へ勇
 戦して又之と逐ひ退けたりりども賊徒へ矢張
 向坂鳥の巢辺の臺場を固守す翌二十六日正午よ

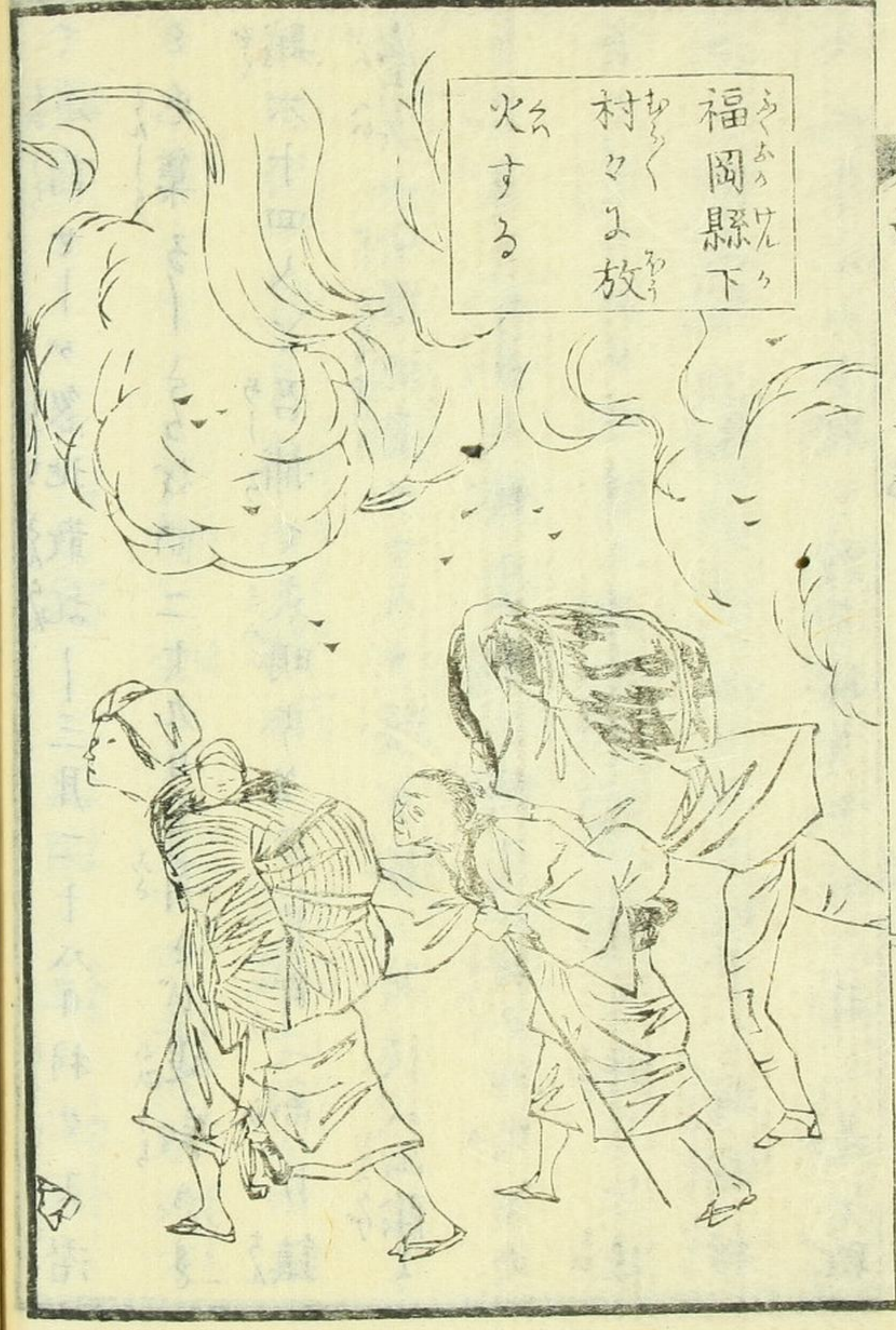
り官軍大に進軍し木留に到る其鋒先極めて鋭
 くして威勢殆んど賊徒が接戦防禦よりなき
 程の一大進撃ありて賊壘十三四と取りたりこの時
 一も賊徒の死傷最も多く官軍の死傷僅ら五
 六名に過ぎずと又春日艦に二十五日長崎へ入
 港し浅間艦の同日午前十時馬関より細島へ廻
 り川村参軍の長崎へ廻られ東京より二十六日出
 帆の青龍丸の警視局至急御用にて中川一等大

警部が熊本地方へ佐藤二等中警部其外細谷一等少警部ハ鶴崎地方へ何れも巡查二三人づつと連れ各刀と用意ありとりと又戦地にて士官不足ありとて陸軍教導團の生徒ハ追々士官とあり西国へ向けて出張より其欠と補はるとり海と福岡縣下早良郡七九間村にて同縣士族が四五百人集まり暴動と企てて鳥口の兵彼方此方へ屯集せり也る下の関より兵隊が直に出張し

て追討せりが忽地散乱し三月二十八日村々潜と屯集するに同日二十九日再び追討せり賊六十四人と召捕て未明より早良郡へ向け鎮臺兵一小隊巡查六十人繰り出し賊徒ハ山陰より不意に打出し戦ふ中賊徒ハ村々へ火をつけ退き同日午後二時大賊と敗り逃ると追討し恰土郡へ追つり翌三十日の明方曲淵村に屯集したる賊と討ち捕り午後六時と是と敗



福岡縣下
 村々又放
 火する



り散々追退ぞき、又筑前の賊軍ハ三十一日、
 佐賀ヨ入らんとの勢ひ、又長崎縣令ハ彼の地へ
 出張され、賊徒ハ佐賀ヨ入らば、久留米へ逃
 げ追討せよと、三手に別れ、同日脱走し、賊徒三百
 人、不田代へ出張し、官軍方ハ廣島鎮臺の後備
 隊と久留米の巡查ガ六十人、鎮臺兵隊ガ三
 方、別れ進撃し、三方より、大砲小銃を連発し、
 その砲声萬雷の如く、恰も猛虎の勢ひありて進

撃せし折しも、賊徒の伏兵忽然として起り、たち
 砲声天地を崩すが如く、ホーテ黒烟空に漲り、賊
 徒ハ何も抜刀にて切り込めたるを、官軍進んで
 打出し、賊の隊長村上彦十郎ハ八人と生捕り、余
 の賊兵散々に逃さる、鍊砲彈薬刀なとと分捕し、
 又賊將久世義丸外五十人、余ハ官軍の軍中ニ馳せ
 入り、當るを幸ひと切て廻し、必死に激戦して、終
 賊ハ官軍の爲め斃され、久世義丸と始と残

らば討死し又生捕の外五十人の罪を悔んぶ自
 訴ふおよび二三十人の逃げさき追々召さうれた
 りとくろふ去る二十六日却説本留の戦ひの官軍
 勝利まで午後一時よりまはしく烈しく残る賊
 壘と攻立く近寄り折し賊徒の此所彼處
 の物かげより顕れ出て破竹の勢ひにて官軍を邀
 撃し各抜刀にて狂獅憤虎の威を振ひ右横左横
 へと切て廻ると官軍の始とり程の物の數とも

せず暫時の是と戦ふその勇敢なるの賊徒の切り
 込むと心得とりと銃槍よく防ぎ苗め切り立衝き
 立てるせしが賊徒へ必死の猪武者るまは斯くて
 果トと士官等の自う々真先に進んで撃手やす
 めと喇叭の声ともも雷神の如く大喝一声と
 兵士と励まし近寄る敵へ各刀と揮ひらとを切
 て落し或は馬蹄を蹴ちらうたる士官の働らき
 に崩れ立ちたり味方へ取てかへ大砲小銃と連

發したるは流石猛りたちしる賊軍も防戦すす
 の術なくも浮足とありて引き退ぞくと官軍を
 此圖と遁するともなく烈げしく進撃し賊軍
 三四を陥入れしる日の戦ひは互ひよ死の
 激戦ありしを双方死傷も夥しく屍の積んで
 山とありしけり
 三條岩倉の両公より華族諸君も商議せ
 られし書左の通り

鹿兒島縣賊徒征討ノ命下リシヨリ
 連日ノ奮戦弾丸ヲ冒シ鋒又ニ觸レ
 軍人ノ創傷ヲ受クルモノ少ナシトセ
 聖上深く憫惻ニ被思召一特ニ近臣及
 ビ侍醫等ヲ差遣ハシ且ツ物ヲ賜ハリ
 テ厚ク慰問セラレ而フシテ戦地ノ病
 院療養看護專ハラ慎重ニ手ヲ尽



両軍憤虎
 の威と振
 つて木と留
 りて激戦す



サセ王フニ付キ今般 両后宮ヨリモ御
 出サレノ趣キモ之レ有リ重ヌルニ恩賜
 ヲ以ツテス實ニ慈愛ノ渥キ帝ニ入
 院ノ病徒ヲシテツノ恩惠ヲ感泣セシ
 ムルヲミナラズ出征ノ壯士モ益々奮
 勵シテ其ノ身命ヲ惜マザルニ至ルベ
 シ抑實美具視等之レヲ聞ク前年土
 魯兵ヲ構ヘ英佛師ヲ出シテ土ヲ援

クルヤ連歳ノ戦ヒ將士ノ創傷ニ罹ル
 モノ甚ダ多シ時ニ魯后親シク病院ニ
 臨ヅミ懇ニ其ノ痛苦ヲ問ヒ且ツ厚ク
 物ヲ給ス又英國ノ婦人某氏ハ金銀
 衣物ヲ富豪ニ贖シ貴族ノ孀婦處女
 ヲ募リ相率キテ遠ク土国ニ赴キ軍
 中ニ就テ看護ヲ為シタリ其ノ英國
 ニ送り歸セル者ハ女皇親ニク病室

二低リ慰問備サニ到ルト又近時字仏
 ノ戦ヲ開クニ方リ兩國ノ皇后屢々
 軍陣ニ就テ創者ヲ親問セシニ方リ
 兩國ノ將士唯進死ノ榮タルヲ慕
 ヒテ退生ノ辱タルヲ知ルニ至ルト
 歐人誇ルヲ以テ美談トナス今我が
 両后宮ノ此ノ恩令アルモ彼ノ各
 后ノ為ス所ト其ノ音符節ヲ合スガ

如シ苟クモ人心アルモノ之レヲ拜承
 シテ感奮激勵シ各々其ノ義務ヲ尽
 サン事ヲ思ハザランヤ且ツ夫レ華族タ
 ルモノハ士民ノ上ニ位シ
 天皇ノ殊眷ヲ辱ナリシ今日ノ際徒
 ニ褸衣甘食スルノ時ニアラス宜シク
 衆ニ率先テ報効ヲ圖ルベキハ固ヨリ
 論ヲ俟タズ既ニ某々氏等軍資獻金

ノ出願アリ其篤志実ニ感スルニ堪タリ
 此事ニ於テハ別ニ協議スル所アラントス
 而シテ其妻女タル者ニ於テモ亦各々其身
 手ヲ勞シ入民義務上ノ一分ヲ尽サシムヘ
 キハ當然ノ事ナルベシ其需用スル所ノ綿撒
 絲或ハ縹帶ノ類ヲ製シ以テ聊カ創者看護
 ノ勞ヲ助シメハ庶幾ハ両后宮恩命ノ旨ニモ
 副ヒ且ハ報効ノ萬一タラシカ此綿撒絲ノ

製タル為シ易キノニモ其病者ニ談アルヤ
 甚ダ大ナル者ト為ス近日大坂府下ノ商高橋
 氏ノ處女自ラ首飾ヲ鬻ギ以テ軍資ニ供セン
 一ツ府廳ニ請ヒ又上州高崎ノ士族松井氏ノ
 老婦ハ身薪水ノ苦ヲ擔任シ二人ノ男子ヲ
 巡查ニ服役セシメ以テ國恩ヲ報ゼン一ツ願
 出タリト載テ新聞紙ニアリ之ヲ讀テ覺工
 不冷汗皆ニ浴シ乃チ鄙見ヲ陳ジ以テ同族

諸公ニ商議スルモノ如此

三條實美

明治十年三月

岩倉具視

此外兩公より華族諸氏へ廻され一文武戰時
小際せを別して華族が應分の義務と盡すべ
き理を説れしといふ

西南太平洋記六編卷之上 終

010190507667

